

第118回シンポジウム「押し寄せるオンライン化」

Everything goes online

倉本 繁^{1*}・阿相 英孝²・谷畑 昭人³Shigeru KURAMOTO^{1*}, Hidetaka ASOH² and Akito TANIHATA³

令和4年1月18日(火)に「押し寄せるオンライン化」シンポジウムをオンライン(webex)にて開催した。このシンポジウムは、昨今のコロナ禍に即したオンライン化に関わる課題やオンライン技術が大学・企業・学会の将来のあり方に及ぼす影響に関する情報共有と議論を目的とするもので、4名の講師より貴重なご講演をいただいた。従来の企画委員会が担当するシンポジウムが軽金属学会に関連する専門分野のテーマを対象として実施しているのに対して、今回は専門分野とは関係のないテーマを対象としているが、多くの会員が興味を持つと思われる内容であるとの考えから、学会の創立70周年記念事業の一環として実施された。当日は増田企画委員長からの開会の言葉に引き続き、4名の講演者にご講演いただき、その後パネル討論も実施した。

当日のプログラム(敬称略)は以下の通りである。

1. オンライン化と第3世代の大学
東京大学大学院 情報学環 吉見 俊哉
 2. オンライン授業がもたらす大学生の心理の変化
茨城大学 全学教育機構 畠田 敏行
 3. テレワークが企業組織に与えるインパクト
情報通信総合研究所 國井 昭男
 4. オンライン化が産むストレス
東京工業大学 保健管理センター 齋藤 憲司
 5. 学会活動のオンライン化による可能性と限界
パネル討論司会 本田技術研究所 谷畑 昭人
- 吉見先生からは、今後の大学教育のあり方がオンライン化によってどのように変化すべきかについて講演がなされた。大学授業のオンライン化は、対面授業との制約条件の違いから、クラス人数や授業方法自体の変革が求められる。日本の大学教育の特殊性と今後向かうべき方向性については、目的遂行的な教育ではなく、価値創造的な観点からの教育が求められ、オンライン技術を利用してそのような方向性を実現することが重要であるとお考えを示された。畠田先生からは、茨城大学で実施したオンライン授業の実態と、授業アンケートの結果から見られる教育効果や学生心理の変化について説明がなされた。学生によって背反する意見が見られるなど、多様な心理状況が反映された結果が得られており、それに基づいて今後オンライン技術を活用してどのように教育を進めるかについて意見が出された。國井氏からは、地方創生をはじめとする社会的課題や、人材不足などの経営課題を解決する手段としての平時のテレワークと、コロナ禍における有事のテレワークの違い、テレワークの阻害要因としてのコミュニケーションと生産性の問題や、オンライン化による職場内での情

報伝達などの組織構造の変化の可能性などについて解説がなされた。齋藤先生からは、日頃のカウンセリング経験をもとに、オンライン化やテレワークの推進に



図1 パネル討論

による環境変化が生むストレスや、この環境変化により生じるトラブルの例とレジリエンスを高めるなどの対処法について解説がなされた。自身並びに構成員の心身のコンディションに留意し、研究・職場環境の人間関係や学問分野ごとの文化を把握してオンライン化の影響を考慮する必要がある。

パネル討論においては、4名の講演者に加え、学会側から熊井 真次 会長、青木 孝史朗 大会運営委員長、増田 勝昭 企画委員長、世話人3名がパネラーとして参加した(図1)。各講演者への会場からの質疑内容のほかに、軽金属学会のオンライン化に関するアンケート結果をもとにパネル討論を実施した。会場からは、大学改革を実現するためにはどこから手をつけるのがよいか、外国の大学に比べて日本の大学の授業科目数が多いのはなぜか、授業や会議をオンライン開催する際に適した人数規模はどの程度か、などといった質問がなされ、講演者がこれに回答やコメントを行った。アンケート結果については、講演大会、国際会議、学会委員会のオンライン化に伴い、対面開催と同様の効果をもたらすための工夫や、オンライン開催での課題について紹介がなされ、関連する事項に関して討議を行った。パネル討論の最後に、熊井会長の総括により閉会となった。

本シンポジウムの参加者は、講演者とパネラーを除いて59名であり、その約半数は大学・研究機関からの参加者であった。残りの半数は、素材メーカー、その他製造メーカー、学協会事務局が約1/3ずつとなっている。なお、本企画は会員資格の有無によらず参加費無料としており、非会員の方々も9名参加した。学生の参加者が少なかったが、内容を考えるともっと学生を対象とした参加勧誘を行うべきであったと反省している。参加者からいただいたアンケートの結果を見ると、開催形態、時期、内容ともにおおむね好評であったが、シンポジウムタイトルから期待していた内容と実際の内容が合致しない、パネル討論の時間が短く消化不良、と感じた参加者もいたようである。これらの貴重な意見を参考にさせていただき、今後もこのような軽金属関連の専門技術とは異なる分野に関して継続して企画していきたいと考えている。